昔、昔の物語。

西に遥か遠く離れた大地に、小さな国々のひしめき合う地方があった。

今では世界地図にも載っていない、実在したかすら定かではない国。

そこには多くは無い水源、広くは無い作物の実る大地、

そして飢えと渇き、争いがあった。

人々は生きるために少ない資源を求め、奪い合う日々を長い間続けていた。

軍馬の蹄の音が大地に響き、打ち合う剣の金属音と叫び声が天空に轟いた。

親は子の未来を守るために、子は親の仇を討つために戦場を駆け抜けた。

国土は荒れ、貧しさだけが続き、それぞれの国の王様だけが明日こそ支配という名の果実を手にすることを夢見ていた。

そんな悲しい時代が幾年も続いた頃、ある小国の王に娘が生まれた。

星の光のようにきらめく金色の髪、絹細工を思わせる薄桃色の肌。

その姿そのものが宝石のような輝きを放つ美しい姫の誕生は、戦に荒んだ王の心を大層癒し、国に住まう者たちも諸手を挙げて祝福したとのことだった。

姫は王やきょうだいたちの寵愛を受けて貧しさのなかでも気品を損なうことなく育っていった。好奇心に満ち溢れた明るい笑顔の裏にはしかし、尚変わらず続いていた争いの日々が落とした深い影が宿っていた。彼女の兄――すなわち王子たちも何人か、戦から帰らぬ人となっていたからだ。父は姫には優しかったが、敵を打ち倒す為には容赦の無い男だった。その相反する姿は、姫の小さな胸を締め付けるのだった。

生存。支配。繁栄。誰もがそんな欲望に突き動かされ。

殺戮。服従。滅亡。誰もがそんな現実と背中合わせだった。

蒸し暑く無慈悲に降り注ぐ陽光と、身を凍らせる冷たい闇夜とが幾度も繰り返される。

姫は、棺となって帰って来た愛しい人を前に泣き叫ぶ女達の声を聞いていた。

――ああ、こんなことは終わらせて。神様、なぜあなたは父に、兄に、争い合う人々に、失うばかりの人々にその愛を分け与えてはくれないの？

そんな、とある夜。

新月の暗闇は、姫の頬を伝う涙さえも覆いつくす。

そんなとき、小窓の向こうからかすかに、けれどはっきりと鳥のさえずりが響いた。聞いたことも無いような美しいその声に姫は耳を澄まし、幼い頃に博識な旅の商人から教わったある伝承を思い出していた。

――小夜啼鳥（さよなきどり）――

ここらじゃとても珍しい鳥なんですがね。新月の夜、その歌声を聞くことが出来たものはその鳥の導きによって、一輪の白い薔薇を見つけることができるんです。そして、その薔薇を胸に挿しておいて、叶えたい願い事をひとつ、強く念じ続けると……その薔薇は段々色が赤く染まっていって、真っ赤に染まり切ったとき、どんな願いも必ず叶うそうですよ。もっとも――

微かに注ぐ星の光を頼りに姫は寝床を抜け出して、鳥の声が誘うほうへと向かった。荒野と化した大地は姫の足を傷つけ、吹きすさぶ風に身を震わせながら、けれどはっきりと耳に届く小夜啼鳥の声は、姫を勇気づけた。やがて深い闇夜を切り裂くように、彼女の眼前には伝承の通り白い薔薇が一輪、咲いていた。

その言い伝えを知っていたからこそ、姫はその薔薇を拾い上げ、棘を服の胸元あたりに刺すようにして身に着けた。白い薔薇の放つ淡い光を頼りに、彼女は城へとたどたどしい足取りで帰って行った。

そのときには既に、小夜啼鳥のさえずりは聞こえてこなかった。

姫はそれからというもの、身体の具合が優れないことが多くなった。快活で輝かしい笑顔は少しずつ陰り、一日中部屋で眠りにつき王にすら姿を見せない日が増えていった。国中の医者がかわるがわる王の命を受けて姫の容態を診るも、その原因は何一つわからなかった。

姫の胸元の薔薇が日々、赤く染まりつつあることには誰も気づかなかった。

姫が一心に願ったのは恒久の平和。国が戦に勝つことではなく、傷つけあうことで苦しむ人の居ない世界の訪れだった。

するとしばらくして、突如国の王様は兵たちに武器を棄てさせた。その一方で周辺の国に使者を送り和平を持ち掛けた。王と姫の国には作物を育てるだけの土地があったので、隣の国とは宝石や鉱物資源と引き換えに食べ物を分けてもらう約束を取り付けた。更にその隣の国も武器を置き、それぞれの国が公正な取引を行い、ときには無償で分け与えることで争いは止まり、多くの犠牲を払った戦は終わりを告げたのだった。

しかし、心変わりの原因はその時の王自身を含めて誰にもわからないままだった。

さて、その時。当の姫はどうなったと思う？

そう。心からの願いを叶えた彼女は、寝室から出ることは叶わず胸の薔薇を真っ赤に染めて息を引き取った。王はその時、おとぎ話に過ぎないと思っていた小夜啼鳥の伝承が真実であったことを知り深く嘆き悲しみながらも、姫を国で最も美しく、空に一番近い高台のうえに彼女を埋葬することにした。

……ところが。

話はこれで終わりじゃない。

それから幾百年ののち。既に姫が生まれた王国は存在していなかった。

けれど、姫自身はそこに居た。長い眠りから覚めたような、虚ろな瞳に映る景色は所々に当時の面影を残すものの、彼女にとってはまるで別世界。

鉄の塊が大空を飛び回り、剣よりもけたたましい音を放ち弓よりも遠くから人を傷つけることのできる、銃と呼ばれる武器。そういったものが彼女の目の前に突如として現れた。

いや、近代になって始まった世界中を駆け巡る戦火の嵐のなかに姫は蘇ったのだ。

なぜ？　かつてと変わらない悲鳴、馬とは違う地響きの音。そして立ち上る炎、炎。

新たな憎悪と暴力が、姫に新たな呪縛を与えることとなった。

『姫が一心に願ったのは恒久の平和』それは、『世界のどこかで戦いが続く限り』叶うことのない願い。そしてそれは、最早彼女ひとりの願いの力では如何にもならないほど果てなく広がるばかりだった。

悲嘆に暮れるより彼女は、ふたたび小夜啼鳥の導きに誘われるまま旅を続け、無数の白い薔薇が群生しているある場所を見つけた。

――この薔薇をひとりでも多くの人に渡して、ともに平和を願ってくれれば――

それは、とても恐ろしいことだと姫は思った。そして世界の様相は既に彼女の知るところではなく、個人の願望のため、より大きな争いを呼ぶ為に使われるかもしれない。

何より、この薔薇に願いを込めたものは命を落とすし、叶わなくとも表裏一体となっている呪いに囚われるかもしれないのだ。

だから、自分ではなく他人のことを強く思うことのできる誰かにこの薔薇を託そう。

自分と願いを共にしてくれなくてもいい。

人を思いやるほんの少しの優しさが積み重なって、ひとりひとりの願いが水面のように広がれば、今もどこかで炎と怒りと、涙の溢れる世界もいつかきっと。

そしてそれは、彼女自身の願いが成就し、安らかな永遠の眠りが訪れる日。

今では失われた王国の美姫は、ひとりの花売りの少女――ソフィー＝ショルと名乗り世界のどこかを旅している。傍らに友とよぶことのできる、小夜啼鳥を連れて。

そうそう、８月３日の話だったね。

王国は既に失われて久しいけれど、その後に建国された国には願いを叶える白い薔薇と、小さなその身に余る願いを秘めた姫の悲劇は今なお語り継がれている。

だから、彼女の命日――すなわち、８月３日には心ある人々によってかつて彼女が眠っていた高台に赤い薔薇の花を手向ける風習が残されているのさ。

一日も早く、姫の願いが叶い心から安らげる日が来るようにね。